

若者の街

たなか踏基

東京には、若者の街がある。

「つ」した若者の街は、自然発生的であるが、流動的に出来上がる。昔なら、神田、御茶ノ水界隈を中心とした学生街や古本屋街であろうか。若者が屯する街の変遷は、時代を写す鏡である。ファッションや流行に密接に運動して形成されてきたからである。銀座のみゆき道りに屯した、「みゆき族」は特異のファッションで、原宿から代々木界隈に出没した竹の子族は、路上パフォーマンスで、自分達の個性をアピールした。原宿、表参道は、お洒落に敏感な街である。若者の個性とこだわりで満ちて常に時代の風を肌で感じられる地域である。ファッションやグルメは無論、美容と理容室が共存する時に、奇異な芸術が炸裂する実験場と化する。

隣接する若者の街の代名詞、渋谷の街は、地方から上京する少年少女達で溢れかえるが、当初は「Tベンチャー」の街でもあった。渋谷駅の八幡公は、今でも待ち合わせの目印である。シブチ力から、掃き出さされる人の群れは忽ちにして、道玄坂方面に吸い込めれるように流れていく。昔、東急文化会館のプラネタリウムで、宇宙のライブを眺めた記憶のある人は、若者といつよりシアアである。昔からシネマライブの街であるが、最近の夜の渋谷は風俗街に豹変し、朝まで眠らない。

軟派の若者に紛れ、スカウトといつ名の現代の女術が公然と出没するのは、渋谷の街だけではない。新宿歌舞伎町界隈でも、同様で上京した少女達を誘惑する。少女達もお小遣い欲しさに平気で軟派され誘惑される。中には商才に長けた少女達が居て、中高年の男達を逆に鴨にする者まで出没するといつ。秋葉原といえは、電気街であった。

勿論冷蔵庫や洗濯機等の家電商品を商つ店から、パソコンVオーデオ等の専門店が軒を並べる。一度路地に入れば、アニメやゲームのCD/DVDに群がる「フリーター」風のオタクの姿がある。電子回路部品のジャンク屋を漁り、図面見ながら部品を捜す電気少年のオタク達は今昔も集まってくる。

「フリーター」「ひきこもり」「ニート」といつ言葉も、現代の若者の社会現象を現す言葉として、すっかり東京の街に定着した。加えて、秋葉原界隈に発生した、新しいオタク向けの産業、「萌えビジネス」に至っては、熟年層の常識を超える社会現象であるといつ。

「ニート」は一口で言えば、若年無就業者、NEET (Not in Education, Employment or Trainingの略)として一九九〇年代の英国で社会問題化して、労働政策の俎上に上つた。日本でも内閣府の研究會調査に寄れば、二〇〇二年時点で、ニート人口は既に八十五万人に達しており、五十二億円の対策費が予算化されようとしている。厳密には、アルバイトや派遣等で働く「フリーター」と区別されているといつ。

度重なる家庭内暴力や犯罪を引き起す「ひきこもり」も、未就業と言つ点では共通で、精神障害者とは考え難いが、何等かの原因で自身喪失、六ヶ月以上自宅に籠つて社会参加しない状態を表現している。発端は学校の不登校が主因にあるとされる。

「ニート」と「ひきこもり」の線引きは極めて曖昧である。親の「あまやかし」にあるといつ指摘もある。両者ともに、元は働く意欲を持っていた。働けない人でも、その意義を誰よりも真面目に考えていたはずだ。その真面目さが仇となり、人より優れて専門的な能力や温厚な対人関係が築けなければ生きられないと思ひ込む。「だらしない」「甘やかされている」といつよりも、むしろ不器用で真面目過ぎる人々の群れとでも表現できる。昨年有る銀行系の調査報告が発表された。

「萌え市場は約九百億円」は、株式市場の投資家の眼を惹いた。その調査対象は、「ミックスDVDビデオゲームの二市場だけの推定数値である。萌え」とは、アニメキャラクター、もしくはそのキャラクターの類に恋焦がれることである。対象は、人間の女性を対象とするのと同じように、つしたキャラクター人形を恋することだ。ネットの「チャンネル」といつサイトから「電車男」なる小説が生れて、ベストセラーとなり、TVドラマ化もされ視聴率も稼いだ。

今結婚できない男性が急増、結果として萌えの感情が沸き起る。現実の少女への絶望から始まっている。世の若者の大部分は、決してイケメンでも三高でもなく、特別能力に秀でている訳でもない。今も昔も女性の関心を買おうと努力するのは、色気付いた男性の特徴である。E写真めがけて射撃するのは、空しい青春の特権であるのだが、つした努力は今も全て徒勞に終わる。そうした結果が萌えである。

秋葉原界隈に出現した、メイド喫茶で「ご主人さま」と呼ばれて奉仕される若者がいる。「スフレ衣装」に群がる若者、フィギュアといつ人形がショーケースに飾られる、購入するのは、現実の女性を恋することを止め嬉々とした若者達の姿である。

これ等の現象を、単に若者の生きる力の低下とみるか、現代社会に咲いた仇花とみるかは自由だが、根底に熟年も含めた男社会が、間違ひなく可笑しくなっている兆候と捕えて良さを認めてみる。

常に「男らしさ」を主張し、且求められてきた家庭や社会、そして学校や職場環境が変り、従来の権威の基盤が揺らぐことを恐れる男を巡る環境に本質的に抵抗し、いやそれは、蟻螂が交尾後の雄を食い殺すのと同様に、生物学的な雄の宿命で、逆らうことのできなない脆さを見做すべきであるといつ。